

はじめに

昨年2006年8月、医療制度の研究会主催者である医師から次のような講演依頼が届いた。

最初は現場の立場で提言すれば、現場を知らない官僚やメディアが理解してくれて、制度改革も良い方向に向くだろうなどという淡い期待がありましたが、そんな甘い話は無く、同時に医療の仕組みや政策は病人のニーズと関係ない別な意図を持って動いていることも実感するようになりました。・・・中略・・・最終的に力になって現れるのは政治であり、社会保障のデザインになるので、先生のご専門からお考えいただいた、批判も含めた医療や政治に対するお考え、目指すべき方向性などをお話したいと存じております。

このメールをもらって引き受けた講演「日本の社会保障と医療—小さすぎる政府の医療政策」の要旨が、本書冒頭の文章である。

また、『論座』が今年3月に「医学部と医療崩壊」の特集を組んだ。そこに掲載された「医学部人気と医療崩壊の間にある政治的無責任」が、本書第2の文章である。

ところで、最近医療関係でいくつか講演をしている。そこで、これだけはみなさんに伝えたいと言って、常に最初に話してきたのは次のメッセージである（2006年11月5日「地域医療研究会」にて）。

医療をどうしても変えたいのであれば、雨が降ろうが槍が降ろうが、はたまた空からミサイルが降ってこようが、今日の医療崩壊に手を打とうとしない政党には拒否権を発動するしか方法はありません。今展開されているのは、教育改革と社会保険庁解体で、その背後にある組織を抵抗勢力に仕立てあげて来年の参議院選をなんとか乗り切ろうという安っぽい政治戦略のように、わたくしにはみえます¹。こういう安っぽい戦略に騙されて、来年7月の参議院選で、選挙当日に今日の医療崩壊を認めていない政党に思わず一票を投じないことです。与党であれ野党であれ、長年の医療費抑制のためにいろいろな面でおかしくなっている医療を直視しない政党を、他の理由ででも支持してしまったら、それで終わり。・・・今日の医療問題に取り組みもうとしない政党を選挙で支持をしては、医療は変わりません。選挙の後に医

¹ もっとも、選挙の争点作りが政治家の目論み通りに進むとは限らないところが世のおもしろいところでもある。2006年11月段階では、今夏の参院選では教育改革、社会保険庁改革を争点に大いに盛り上がり、自民党はねらっていた。今年2007年に入ると、「三本の矢」という言葉が使われるようになり、教育改革、社会保険庁改革の他に公務員改革が強く意識されるようになる。「選挙イヤーを語る（1）自民党幹事長中川秀直氏」『日本経済新聞』2007年1月4日朝刊。けれども、教育改革は大いに、社会保険庁改革はいまひとつ盛り上がりかけ、「三本の矢」戦略も目論み通りにはいかないといったところで、彼らは未だ、参院選で勝ち目のある争点をどれに絞ろうかと模索しているのが現状ではある。もちろん、野党も同様に・・・。

療がどんなに酷い目にあつたとしても、後の祭りというのが、間接民主主義というもののなのです（本書「勿凝学問58」p-）。

また、次のようなことも話している。

今日、医療関係者、医療経済・政策研究者のほとんどが、医療費は引き上げるべきで、医療費の配分は是正すべきであるとの共通認識をいただくほどに、日本の医療はおかしくなってきた。そしてメディアも、ひとり日本経済新聞の最初の方の頁を除いては、新聞、テレビともに足並みがそろってきた。

となれば、今日、医療関係者、医療経済・政策研究者の間で論じ合うことは、いかにすれば、日本の医療を崩壊から守ることができるかというポイントに絞られることになる。答えは実にシンプルである——今の医療に不満をもつのであれば、選挙で与党に投票しない、すなわち、今日の医療崩壊に手を打とうとしない政党には拒否権を発動するしか方法はないということが、この講演のメイン・メッセージとなる。

医療費の水準、医療供給体制、医療消費者の費用負担のあり方などは、政治で決まっている。・・・ゆえに、今日の医療に憤りを感じて、医療を変えたいというのであれば、政治を変えるしか方法はない。そして政治を変えるには、選挙で政治家に圧力をかけるしか術はないのである（本書「勿凝学問 58」pp-）。

この『医療政策は選挙で変える』は、規模の大きい順に、看護師 76 万、准看護師 39 万、医師 27 万、薬剤師 24 万、歯科医師 10 万、理学療法士 5 万、臨床検査技師 5 万、保健師 4 万、作業療法士 3 万、診療放射線技師 3 万、助産師 3 万——医療従事者総計およそ 200 万人（2004 年度）の投票など、恐れずに足らずとしてきた政治家たちを、第一の読者として想定している。彼ら政治家は、たとえば今回新たに厚生年金に適用されるおそれのあつた約 130 万人の専業主婦（第 3 号被保険者）には大いにへつらうが（本書「勿凝学問 71」「勿凝学問 76」参照）、医療従事者はどうせ一枚岩ではなからうと高をくくっている（「勿凝学問 58」p.）。本書第二の読者としては、医療従事者・医療問題に関心をもつ人たちを意識しており、そしてさらには、年金、社会保障を軸にこの国の未来について考えている人たちにも、手にしてもらえればと願っている。

変転つねなき現世の政治の動きを支配しているものを、マキャベリは気まぐれな運命の女神に譬え、次のように論じた。

運命の神は女神であるから、彼女を征服しようとするれば、うちのめしたり、突き放したりすることが必要である。

まがりなりにもマニフェスト選挙がこの国に根付きはじめ、選挙の事前に政策の内容が示されるようになってきた。そしてネットを通じた情報交換が相当なまでに普及してきた。この二つの条件を重ね合わせると、今の時代、医療関係者や労働者たちが政治家をかかえたり、政党に大金を献金したりするような政治に媚びる旧来の手法を採ることは、かえってみずからの行動に足枷を科すことになるのではないかと思っている²。政治家が欲するのは選挙の際の票にあり、他は票を得るための手段にすぎない。選挙の度に、自分たちに最も関心のある政策に集中して、政党を評価しては投票する。選挙前夜にでもマニフェストの中の、たとえば医療政策のページを見るまでは、どっちにつくか分からせずに、主体的に浮動票を演じる——それでいいではないか（本書「勿凝学問 46」p.-「勿凝学問 64」p.-参照）。

もつとも、自分たちが一番関心のある政策ばかりに焦点を当てる投票行動は、民主主義の王道ではなく邪道であるといえれば邪道である。間接民主主義の下での選挙は、複数の争点がひとつにまとめられた「争点の束」——最近ではマニフェストという冊子一冊の全体——の良し悪しを競うものであり、有権者も、争点の束を争点の束として評価して支持する政党を決めるのが、正しい民主主義のあり方ではあろう。けれども、2005年9月11日の郵政民営化選挙で、有権者に「争点の束」として政治案件を提示すべきところをシングル・イシュー化することによって、与党は大勝した。この体験を共有する政治家たちは、与野党を問わず今後しばらくは——否、永遠に？——シングル・イシュー選挙への誘惑から逃れることは難しいであろう。ならばわれわれも、医療問題に改善の兆しがでるまで、そしてこの国の未来に明るい兆しを見ることができる日まで、われわれの方からシングル・イシュー選挙を演出しようではないか（本書「勿凝学問 58」p.-参照）。

医療関係者が参加される講演ではよく、「9.11の郵政民営化選挙の際、よもや、与党に投票した医療関係者はいなかったでしょうね。あの時すでに、この国の医療政策がどの方向に向かっていくかということは分かっていたんですけどね——」と話している。

そして再び、言っておく。

与党であれ野党であれ、長年の医療費抑制のためにいろいろな面でおかしくなっている医療を直視しない政党を、他の理由ででも支持してしまったら、それで終わ

² 「団体の選挙貢献 査定へ 自民 業界要望 扱いに差」『朝日新聞』2007年5月8日朝刊にあるように、自民党が「参院選に向けた業界団体の引き締め策として、同党への支援を数値化し、貢献度に応じて団体側の要望を政策に反映させる仕組みを導入することを決めた」ことは承知の上で、今日のマニフェスト選挙の下では、医療関係者や労働者たちは「政治に媚びる旧来の手法」よりも政策形成に影響を与える方法があると、わたくしは見ている。

り。・・・今日の医療問題に取り組もうとしない政党を選挙で支持をしていては、医療は変わりません。選挙の後に医療がどんなに酷い目にあったとしても、後の祭りというのが、間接民主主義というものなのです。

今年3月16日の経済財政諮問会議で、安倍首相は、医療分野の社会保障費削減策について「具体的な改革項目と数値目標を盛り込んでほしい」と、臨時議員として出席していた柳澤厚労大臣に指示したらしい。この国で最も必要とされる改革は政治改革だろう——なぜならば、この国の権力機構の中で政治が身の丈以上に強くなりすぎて権力バランスが崩れかけている。結果、この国の未来がかなり危なくなっているからである（本書「勿凝学問 72」「勿凝学問 73」「勿凝学問 75」参照）——という強い問題意識をもつわたくしの目の前で、医療費・社会保障削減を求める首相の発言が続いたことが、生来ものぐさなわたくしにこの本を出させる最後の後押しをした（本書「勿凝学問 77」参照）。彼ら政治家には、日本の医療が「高コスト構造」に見えるらしく、この「高コスト構造」を改善(?)したいらしいのである。もっとも最近、与野党はそろって今夏の参議院選で医療問題を無視することはできないと動き出してはいる——後は、読者の判断に委ねたい。そしてこれからは繰り返し繰り返し、「医療政策は選挙で変える」こと、「選挙でしか医療政策を変えることができない」ことを思い出してほしい。

なお、政治というものは、選挙直前以外のことなど国民は必ず忘れてくれるという政治家たちの読みのもとに動いているようである。どのようなことを国民は忘れてくれると彼らが考えてきたのかを——たとえば、郵政造反組自民党復党、パート労働への厚生年金適用拡大問題でみせた利益集団のエゴに阿^{おもね}た“容赦なき弱者切り捨て”などを——、本書を手にしてひとつずつ思い出しながら、今日の政治がどのようなメカニズムで動いているのかについていろいろと考えて、遊んでもらえればと思う。